

# 高校生における心理学の情報源と心理学イメージの関連

## — 自己および不思議現象認識欲求の観点からの検討 —

泊 真 児

---

### 要旨

本研究は、自己および不思議現象認識欲求の観点から高校生における心理学の情報源と心理学イメージの関連について検討することを目的とした。沖縄県内の県立3高校の生徒計184名を対象に、心理学に関する情報源、心理学イメージ、自己および不思議現象認識欲求を測定し、これらの関連性を分析した。その結果、(1) 生き方に関する自己認識欲求や不思議現象認識欲求が高いほど、読心術パフォーマーの「メンタリストDaiGo」や「ホンマでっかTV」などの通俗的心理学を情報源としていること、(2) 高校生における心理学の情報源と心理学イメージの関連は4タイプに分けられる、すなわち、「神秘・オカルト・通俗心理学系」、「情報源・イメージ無し系」、「真理探究系」、そして「文学・サイエンス系」であることが示された。これらの知見が持つ心理学教育への含意を、泊(2015)の大学生調査結果との異同もふまえて論じた。

キーワード：自己および不思議現象認識欲求、心理学の情報源、心理学イメージ、心理学教育

### I. 問題と目的

高校生は、「心理学」という学問の情報を一体どこから入手し、それらはどのような「心理学」イメージの形成に結びついているのだろうか。これが本研究の基本的な問いである。

わが国において、高校段階までの中等教育では、実質的に「心理学」という学問分野を体系的に学習する機会はない。確かに、学校設定科目などの形式で入門的な内容の「心理学」科目を設定したり、高等学校の「倫理」の科目で青年期の課題や自己形成の問題を取り扱う青年心理学分野の学習は存在している。しかしながら、それらはごく限られた学校のみで行われていたり、学習内容が狭く偏っていたりするのが現状である。実際に、高橋・仁平(2010)は2009年度に高等学校で使用された全ての「倫理」教科書の内容を精査した上で、大きく3つの課題を指摘している。第1に、「青年期の課題」についての学習内容が心理学関連事項全体の7割を超えること、第2に、学習内容が精神分析学(派)に偏重していること、第3に、反証可能性のあるエビデンスを持った心理学概念や事実の記載がほとんどないこと、である。

一方で、巷には似非心理学関連情報が溢れている。民放TVの朝の情報番組では古いコーナー

が、雑誌記事やインターネット上のサイトでは運勢判断や心理テストの類が、書店では血液型性格判断やメンタリズム関連本がそれぞれ定番化しており、いわゆる通俗心理学的な情報が世の中に広く出回っている。一般の人々にとって、それらが心理学という学問の一部ないしは心理学を背景にしたものだとして認識されているであろうことは想像に難くない。こうした巷の似非心理学関連情報や高等学校「倫理」の狭く偏った学習内容にしかアクセスすることができなければ、自ずと心理学という学問そのものへの認識も誤ったものや偏ったものにならざるを得ないだろう。

泊（2015）が4年制私立大学で一般教養科目の心理学を受講する260名の大学生を対象に行った調査結果によると、（1）高校教員の心理学の話が情報源である者は心理学を文学的イメージで捉えていること、（2）自分の生き方や不思議現象について知りたいという欲求が高いほど、「読心術パフォーマーであるメンタリストDaiGoが登場する番組」を情報源として心理学を神秘的で不思議でオカルト的な学問としてイメージしていること、（3）心理学の情報源が民放TVのドラマ・情報・バラエティ番組である者は心理学を科学的イメージや生活・社会に役立つイメージで捉えていること、等が示されている。すなわち、大学生段階でも、「心理学」が科学的方法論と客観的なエビデンスを重視した実証科学的性格の学問であるという認識は乏しいと言える。ましてや、アカデミックな心理学情報にアクセスする機会がごく限られている高校生においては、心理学情報源や心理学イメージは、大学生に比べるとより未分化な形を成しているものと考えられる。したがって、高校生は概ね、心理学を次のような3つのまとまりで捉えていると予測される。1つめに、心理学について特に情報を持たないため特定の心理学イメージを形成していない群。2つめに、民放TVのドラマ・情報・バラエティ番組等に接触し、不思議でオカルト的で通俗心理学な色彩を帯びた学問としてのイメージを形成している群。そして3つめに、何らかの形で専門的な心理学情報に接し、心理学を文系と理系が融合した学問として捉えている群である。本研究では、高校生が少なくともこれら3つのイメージ構造を抱いているという仮説について検討する。

さて、こうした中、日本学術会議心理学・教育学委員会心理学教育プログラム検討分科会は、「学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」と題した対外報告（2008）の中で、心理学を高等教育の専門分野として位置づけるだけでなく、学校教育の教科科目として将来的に中等教育に導入することは急ぐべき課題であると指摘している。一方の教育現場サイドはどのような見方をしているかという点に関して、大辻・塩川・加藤・松葉（2005）が近畿圏の高校2年生252名と教師42名を対象とした高校心理学導入の是非に関する調査を行っている。これによれば、回答した高校生全体の65%が導入に賛成していること、不安や心の問題の解決の仕方・相談の乗り方といった具体的な技法を習得することへの期待が寄せられていること、学習内容として心理検査・コミュニケーション・カウンセリングを扱うことが期待されている、との知見が得られている。このように、心理学を高等学校教育の現場に導入することについては、かなり肯定的な意向があると言えるだろう。しかしながら、心理学の何を、どのように教えるのか、高等学校の教育目標やカリキュラムの中でどのよう

に位置づけるのか、等を実際の導入に向けて考える必要がある。そのためには、当の高校生たちが「心理学」という学問をどのようなものとしてイメージ・理解しているか、また、心理学という学問への興味や関心の背景に何があるのかについて把握した上で、適切な心理学教育の目標・学習内容の設定が図られるべきであろう。

大学生においては、吉村・望月（2000）が教養科目の心理学受講動機として回答件数が多いものに、自己・他者理解、真理の追求、生き甲斐や悩みの解決などがあることを示している。また、谷口・金綱（2013）が心理学専攻生の専攻志望動機や専攻への期待を調べた結果、自己理解や生き方の発見、自分または身近な人が経験したいじめや不登校等の問題解決を図りたい等が含まれることが明らかにされている。このことから考えると、高校生においても心理学を学びたいという興味や関心の背景に、泊（2015）で用いられた自己および不思議現象認識欲求があると考えられる。自己および不思議現象認識欲求に関しては、次のような仮説が導かれる。泊（2015）より、生き方自己認識欲求と客観的な自己認識欲求は女子の方が男子よりも平均値が高いという性差が見られると予測される。また、項目レベルでは、松井（1997）と泊（2015）の結果から、「項目15：占いは、なぜ当たるのか」では女子の方が男子より平均値が高いという性差が見られると予測されるが、その他の項目では有意な差は見られないであろう。

では、自己および不思議現象認識欲求と心理学情報源や心理学イメージの間にはどのような関連性が見られるであろうか。堀野・上瀬（1994）は、自己確立が求められる青年期においては自我同一性の混乱や自己概念の不安定さが生起するため、自己認識欲求が喚起されやすいことを指摘している。自己認識欲求の喚起は自己情報収集行動の生起へとつながるが、自分に関する否定的情報を知りたくないというネガティブ情報回避欲求が生起すると、手近な心理学情報源である心理テストへの肯定的態度が見られる一方で、自己にとってネガティブな結果も含む心理テストへの参加意欲が低いことが示されている（上瀬、1992；上瀬・堀野、1995）。堀野・上瀬（1994）は、自己認識欲求の喚起が手近な心理テストへの肯定的態度につながる心理的背景として、対人関係の不適応感、恋愛に関する不満、将来展望の不安定が関与していることを明らかにしている（上瀬、1992）。泊（2015）においても、自己認識欲求やネガティブな自己情報回避欲求が高いほど「ホンマでっかTV」や「メンタリストDaiGo」等に代表される民放TVの情報・娯楽番組を心理学情報源とする一方で、心理学の専門書を情報源とすることは少ないことが示されている。また、これらの欲求の高さは心理学を「不思議・神秘的・オカルト的」と捉える一方で、「科学的・生活や社会に役立つ」と捉えるイメージと結びついていることも明らかにされている。したがって、本研究の高校生の場合、仮説として次のような関連が見られると考えられる。自己および不思議現象認識欲求の高さは「ホンマでっかTV」等の民放TVの情報・娯楽番組を心理学情報源とすることや、「不思議・神秘的・オカルト的」でありながら「科学的・生活や社会に役立つ」と捉えるイメージと結びついているであろう。

以上の議論をふまえ、本研究では、高校生が「心理学」に関する情報をどこから入手し、

それが心理学イメージの形成とどのように関連しているかについて明らかにすることを目的とする。その際、泊（2015）で用いられた自己および不思議現象認識欲求の観点から検討する。上述してきたことを、以下に3つの仮説として整理しておく。

仮説1：生き方自己認識欲求と客観的な自己認識欲求については、女子の方が男子よりも平均値が高いという性差が見られるであろう。また、項目レベルでは、「項目15：占いは、なぜ当たるのか」においてのみ女子の方が男子より平均値が高いという性差が見られるであろう。

仮説2：自己および不思議現象認識欲求が高いほど、「ホンマでっかTV」等の民放TVの情報・娯楽番組を心理学の情報源とし、「不思議・神秘的・オカルト的」イメージや、「科学的・生活や社会に役立つ」と捉えるイメージを有しているだろう。

仮説3：高校生の心理学情報源とイメージの構造は、次の3つの要素を含むであろう。

- (1) 特定の心理学情報源や心理学イメージを形成していない群
- (2) 民放TVのドラマ・情報・バラエティ番組等を心理学情報源とし、心理学を不思議で神秘的でオカルト的なものと捉えている群
- (3) 高校教諭の心理学の話や心理学の専門書等、何らかの形での専門的な心理学情報源に接し、心理学を文系と理系が融合した学問として捉えている群

## II. 方法

**被調査者** 沖縄県内の県立高校3校の生徒、計184名（女子93名、男子91名）。調査の対象者は、高校から大学への派遣要請により筆者が講師を担当した出張講座「高校生のための心理学入門」の受講生である。学年構成は1年生88名、2年生44名、3年生52名である。全員分のデータを分析に用いた。

### 質問紙構成

本研究で使用した質問項目は、以下の通りである。

**自己認識欲求および不思議現象認識欲求の測定** 泊（2015）による大学生調査の結果との対応関係を比較できるように、項目17と項目19以外は全て同じ質問項目を使用した。自己認識欲求については、上瀬（1992）による自己認識欲求尺度を構成する2つの下位尺度の項目（自己認識欲求14項目とネガティブ情報回避欲求7項目）の中から、それぞれ9項目と5項目を使用した。また、不思議現象認識欲求を測定する4項目については、松井（2001）より“占い系”から2項目「占いは、なぜ当たるのかについて知りたい」と「血液型によって性格が異なるのかどうか知りたい」を採用し、“疑似科学系”と“第四グループ”からは「不思議現象（霊、超能力等）は、すべて科学で説明できるのか知りたい」を用い、項目17に該当する「UFO（未確認飛行物体）は、本当に存在するのか知りたい」については、「宇宙人（地球外生命体）は、本当に存在するのか知りたい」に変更して使用した。変更理由は、菊池（1999, p.35）でも述べられている通り、論理的に考えれば“UFO（未確認飛行物体）は確実に存在する”ため、

真偽不明の不思議な現象について知りたい欲求の程度を問う質問項目として不適当と考えられたからである。さらに、泊（2015）の同尺度における第3因子「不思議現象認識欲求」は信頼性係数が十分な値でなかったことから、「ユタ（沖縄のシャーマン）を、信用してよいのか知りたい」の1項目を追加した。

以上の計19項目について、各項目内容が自分の考えとどのくらい一致しているかを、「5. 一致している」～「1. 一致していない」までの5段階で評定を求めた。なお、具体的な項目内容はTable1に示してあるが、項目10「他の人が、自分について言うことは的外れなことが多い」は因子分析の結果をふまえて除外項目とし、残りの18項目を示した。

**心理学に関する情報源** 高校生たちが一体どのような情報源から心理学に関する情報を得ているかを把握するために、泊（2015）と同様、今野（2000）を参考にした11項目の心理学情報源を設定した。詳細は次の通りである。1. 家族の話、2. 高校の先生の心理学に関する話、3. 家族や高校の先生以外の人の心理学に関する話や講演、4. ホンマでっかTV、5. 上記4. 以外のテレビの情報番組やバラエティ番組の心理学コーナー、6. 心理学の専門的な本、7. 受験雑誌の心理学関係の記事、8. 心理学者やカウンセラーが出てくる映画やテレビドラマ、9. メンタリストDaiGoが登場するメディア、10. 心理学科や心理学専攻がある大学案内やパンフレット、11. その他、である。以上の11項目について、情報源として利用しているもの全てを多重回答形式で選択するよう求めた。なお、「11.その他」は、本研究の分析からは除外した。理由は、回答数が全データ184件中の9件（4.9%）と多くなく、回答内容も、ネット、マンガ、スマホ、該当なし等、まとめられなかったためである。

**心理学のイメージ** 心理学のイメージについても、泊（2015）と同じく今野（2000）を参考にした16項目を設定し、心理学イメージとして該当するもの全てを多重回答形式で選択するよう求めた。具体的な項目内容は次の通り。1. 人間的な、2. 科学的な、3. 合理的な、4. 神秘的な、5. 医学的な、6. 数学的な、7. 文学的な、8. 動物学的な、9. 生物学的な、10. 不思議な、11. あたたかい、12. つめたい、13. 生活（人生）に役立つ、14. 社会に役立つ、15. オカルト（魔術・超自然）的な、16. その他、である。「16.その他」は4件（2.2%）のみと少数であったことと、内容的にもまとめるのが困難（精神的2件、何でも分かる1件、人の心を読めるわけではない1件）であったことから、分析には用いていない。

上記の他に、今後の研究に向けた予備的検討を目的に2項目追加した。1つは「自分のことや人間関係のこと等で、悩みがちな方だ」で、2つめは「あまり物事にはこだわらない方だ」である。前者の項目は、自己概念の不安定さや不明確感および対人関係の不適應感が自己認識欲求の喚起や自己情報収集行動（上瀬, 1992, 1996）、ならびに不思議現象への態度と関連すること（小城・坂田・川上, 2008）から採り入れた。後者の項目は、神経症傾向（不安傾向を意味する性格特性）が不思議現象を信奉する態度と関連するという知見が多い（小城・坂田・川上, 2008; 松井, 2001; 田丸・今井, 2001）ことから採り入れた。なお、この項目は柳井・柏木・国生（1987）の新性格検査における「神経質」尺度の逆転項目である。

**調査の実施手続き** 2014年11月～2015年12月にかけて、沖縄県内の県立高校3校で計

4回の調査（内、1校は同一の高校で2年続けて別々の生徒を対象に講座を実施）を実施した。調査の実施は、担任教諭の了解と協力を得て行われた。全ての調査は無記名で、個人を特定できないことや成績とは一切関係ないことが教示文および口頭で説明され、いずれも講座開講日の10日程前に実施された。郵送による回収の後、筆者が調査データの基礎的集計結果や値の意味を講座の中でフィードバックした。

### Ⅲ. 結果

#### 自己認識欲求および不思議現象認識欲求の尺度構成

自己認識欲求および不思議現象認識欲求を尋ねる19項目について、回答選択肢の“一致している”を5点とし、以下順に4点から1点までの点数を各評定値に与えた。これら19項目に因子分析（主因子法・プロマックス回転）を施した。どの因子にも因子負荷量が0.35を超えない1項目（項目10：他の人が、自分について言うことは的外れなことが多い）を除き、再度因子分析を行った結果、最終的には、固有値の減衰状況（5.27、1.86、1.62、1.27、0.98…）と因子の解釈可能性から4因子の抽出が妥当と判断された。その結果をTable1に示す。

Table1 自己および不思議現象認識欲求に関する18項目の因子パターン行列  $n=184$

	F1	F2	F3	F4	M	SD
<b>F1: 生き方に関する自己認識欲求 (<math>\alpha = .81</math>)</b>						
q1x9 自分に合った生き方が知りたい	.80	-.15	-.02	.05	4.41	0.86
q1x12 今後どのように生きていくべきかについて知りたい	.76	-.03	.06	.04	4.08	1.03
q1x16 これからの人生で、自分には何ができるのか知りたい	.59	.14	.06	.03	4.14	1.08
q1x14 自分がしたいことを見つけたい	.50	.16	-.02	.11	4.11	1.27
q1x3 自分の社会的な能力が、どのくらいあるのか知りたい	.47	.04	.29	-.03	4.17	1.02
q1x7 どうすれば経済的に豊かな生活ができるか知りたい	.46	-.02	.03	-.08	4.14	0.99
<b>F2: 不思議現象認識欲求 (<math>\alpha = .78</math>)</b>						
q1x19 沖縄のユタを、信用してよいのか知りたい	-.16	.83	.07	-.03	3.38	1.40
q1x15 占いは、なぜ当たるのかについて知りたい	-.09	.77	.11	.13	3.46	1.39
q1x18 不思議現象は、すべて科学で説明できるのか知りたい	.20	.54	-.09	-.14	3.61	1.33
q1x13 血液型によって性格が異なるのかどうか知りたい	-.09	.52	.17	.12	3.73	1.37
q1x17 宇宙人（地球外生命体）は、本当に存在するのか知りたい	.36	.52	-.25	-.05	3.67	1.36
<b>F3: 客観的な自己認識欲求 (<math>\alpha = .71</math>)</b>						
q1x5 自分の容姿は、同年代の人と比べてどの程度魅力があるのか知りたい	-.04	-.03	.66	-.01	3.15	1.25
q1x1 自分の本当の性格について知りたい	.29	-.07	.60	.04	4.11	1.13
q1x6 自分についての悪口でも、真実だったらできるだけ聞きたい	.07	.07	.51	-.28	3.89	1.13
q1x11 自分が家族や周囲の人からどう見られているか知りたい	.02	.16	.50	.00	3.95	1.04
<b>F4: ネガティブな自己情報回避欲求 (<math>\alpha = .53</math>)</b>						
q1x4 自分のことについて、人の評価を聞くのは怖い	.015	-.079	.206	.630	3.13	1.28
q1x8 自分に関する、よくないうわさは聞きたくない	-.051	.078	-.220	.554	2.91	1.28
q1x2 自分のことについて、知りたくない部分がある	.163	.038	-.123	.384	2.65	1.23
因子間相関	F1	.47	.60	.16		
	F2		.37	.14		
	F3			.22		

Table1の結果は、泊（2015）の大学生データを用いた因子分析結果とは第2因子と第3因

子の順序が逆になっただけでほぼ同じ因子構造であった。そこで泊（2015）に倣い、第1因子を「生き方に関する自己認識欲求（以下、生き方自己認識欲求と略称で示す）」と命名した。第2因子は、“沖縄のユタを、信用してよいのか知りたい”を筆頭に、“占いは、なぜ当たるのかについて知りたい”等の項目の負荷量が高かったことから、「不思議現象認識欲求」と命名した。以下、第3因子を「客観的な自己認識欲求」、第4因子を「ネガティブな自己情報回避欲求」と命名した。Table 1の4下位尺度の信頼性を確認するためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、「生き方自己認識欲求」は $\alpha=.81$ 、「不思議現象認識欲求」は $\alpha=.78$ 、「客観的な自己認識欲求」は $\alpha=.71$ 、「ネガティブな自己情報回避欲求」は $\alpha=.53$ という値であった。第4因子は項目数が3項目と少ない関係もあり、 $\alpha$ 係数は.70をかなり下回っていたが、項目間の平均相関係数の値は $r=.27$ であった。他の3つの因子の項目間平均相関係数の下限値を全て上回る値であったことから分析には耐えうるレベルにあると見なし、以後の分析には、各下位尺度に負荷する項目をそれぞれ単純加算した上で平均値を求め、4つの下位尺度得点として使用した。

以後の分析を進める前に、自己および不思議現象認識欲求尺度の4下位尺度得点の平均値について性差の検討を行った結果、「客観的な自己認識欲求」についてのみ有意な性差が認められ（ $F(1,182)=9.45, p<.01$ ）、女子（ $M=3.96, SD=0.75$ ）の方が男子（ $M=3.59, SD=0.88$ ）よりも平均値が高かった。なお、自己および不思議現象認識欲求尺度を項目単位で多変量分散分析すると、「項目1：自分の本当の性格について知りたい」、「項目11：自分が家族や周囲の人からどう見られているか知りたい」に有意な主効果（順に、 $F(1,182)=6.78, 9.14, p<.01$ ）が見られ、女子（ $M=4.31, SD=0.92$ ； $M=4.13, SD=1.00$ ）の方が男子（ $M=3.90, SD=1.27$ ； $M=3.64, SD=1.20$ ）よりも平均値が高かった。「項目15：占いは、なぜ当たるか」は有意傾向（ $F(1,182)=3.53, p<.10$ ）ながら女子（ $M=3.65, SD=1.24$ ）の方が男子（ $M=3.26, SD=1.50$ ）よりも平均値が高かった。「項目18：（霊や超能力等の）不思議現象はすべて科学で説明できるのか」も、有意傾向ながら（ $F(1,182)=3.65, p<.10$ ）、男子（ $M=3.80, SD=1.37$ ）の方が女子（ $M=3.43, SD=1.27$ ）よりも平均値が高かった。

予備的検討のために測定した2項目の内、不適応感に関する「自分のことや人間関係のこと等で、悩みがちな方だ」は、自己および不思議現象認識欲求の4下位尺度といずれも有意な正の相関を示し（ $F1:r=.29, F2:r=.28, F3:r=.43$ ；全て $p<.001, F4:r=.22, p<.01$ ）、神経症傾向に関する「あまり物事にはこだわらない方だ」（逆転項目）は、第2因子の不思議現象認識欲求との間でのみ有意な弱い正の相関を示した（ $r=.17, p<.05$ ）。

さらに、自己認識欲求、心理学の情報源、心理学のイメージという三者の関連性を検討するに際し、自己および不思議現象認識欲求尺度の4下位尺度得点について平均値を境に高低群に分けて性の要因とのクロス集計および $\chi^2$ 検定を行った。その結果、いずれも有意ではなかった（生き方自己認識欲求： $\chi^2(1)=0.19, n.s.$ ；不思議現象認識欲求： $\chi^2(1)=0.35, n.s.$ ；客観的な自己認識欲求（ $\chi^2(1)=2.20, n.s.$ ）、ネガティブな自己情報回避欲求（ $\chi^2(1)=1.89, n.s.$ ）。そこで、以後の分析では、男女込みのデータで自己認識欲求、心理学の情報源、心理学のイメー

ジの三者の関連性を検討した結果を示す。

### 自己および不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源の関連の検討

自己および不思議現象認識欲求の4下位尺度の高低群の変数と、心理学の情報源との関連を検討するためにクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った。なお、心理学の情報源としての選択率が全度数の5%未満だった「項目1：家族の話」、「項目2：高校教諭の心理学の話」、「項目7：受験雑誌の心理学の記事」、の3項目は分析から除外した。分析結果をTable2-1～2-6に示す。

Table 2-1 生き方自己認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		TVの情報番組・バラエティ		合計
生き方 自己認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	66(60.8)	
低群	調整済み残差	1.7†	-1.7†	
	度数	64(69.2)	34(28.8)	98
高群	調整済み残差	-1.7†	1.7†	
	合計 度数	130	54	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=2.89†$   
†  $p<.10$

Table 2-2 生き方自己認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		メンタリストDaiGo		合計
生き方 自己認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	64(58.0)	
低群	調整済み残差	1.9†	-1.9†	
	度数	60(66.0)	38(32.0)	98
高群	調整済み残差	-1.9†	1.9†	
	合計 度数	124	60	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.63†$   
†  $p<.10$

Table 2-3 不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		ホンマでっかTV		合計
不思議現象 認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	35(28.4)	
低群	調整済み残差	2.1*	-2.1*	
	度数	20(26.6)	69(62.4)	89
高群	調整済み残差	-2.1*	2.1*	
	合計 度数	55	129	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=4.53*$   
\*  $p<.05$

Table 2-4 不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		メンタリストDaiGo		合計
不思議現象 認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	73(64.0)	
低群	調整済み残差	2.8**	-2.8**	
	度数	51(60.0)	38(29.0)	89
高群	調整済み残差	-2.8**	2.8**	
	合計 度数	124	60	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=7.98**$   
\*\*  $p<.01$

Table 2-5 客観的な自己認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		家族や先生以外の人の話		合計
客観的な 自己認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	91(87.5)	
低群	調整済み残差	1.7†	-1.7†	
	度数	75(78.5)	12(8.5)	87
高群	調整済み残差	-1.7†	1.7†	
	合計 度数	166	18	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.01†$   
†  $p<.10$

Table 2-6 客観的な自己認識欲求の高低と心理学の情報源の関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		映画・ドラマの心理学者		合計
客観的な 自己認識欲求		情報なし	情報あり	
		度数	78(71.7)	
低群	調整済み残差	2.1*	-2.1*	
	度数	58(64.3)	29(22.7)	87
高群	調整済み残差	-2.1*	2.1*	
	合計 度数	136	48	184

注：カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=4.49*$   
\*  $p<.05$

Table2-1および2-2より、生き方自己認識欲求の高群ほど「TVの情報・バラエティ番組」( $\chi^2(1)=2.89, p<.10$ )や「メンタリストDaiGo」( $\chi^2(1)=3.63, p<.10$ )を心理学の情報源として利用している傾向が示された。また、Table2-3と2-4より、不思議現象認識欲求の高群ほど「ホンマでっかTV」( $\chi^2(1)=4.53, p<.05$ )や「メンタリストDaiGo」( $\chi^2(1)=7.98, p<.01$ )を情報源として示された。さらに、客観的な自己認識欲求の高群ほど「家族や先生以外の人の心理学の話」( $\chi^2(1)=3.01, p<.10$ )や「映画・ドラマの心理学者」( $\chi^2(1)=4.49, p<.05$ )



を心理学の情報源として利用していることが明らかとなった。

### 自己および不思議現象認識欲求の高低と心理学イメージの関連の検討

自己および不思議現象認識欲求の4下位尺度の高低群の変数と心理学イメージの関連を検討するためにクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った。生き方自己認識欲求と不思議現象認識欲求を用いた分析結果をTable3-1～3-6に、客観的な自己認識欲求とネガティブな自己情報回避欲求を用いた分析結果をTable3-7～3-12に示す。

Table 3-1 生き方自己認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		医学的な		合計
生き方自己認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	-1.8†	1.8†	
高群	度数	87(82.6)	11(15.4)	98
	調整済み残差	1.8†	-1.8†	
合計	度数	155	29	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.25†$   
†  $p<.10$

Table 3-2 生き方自己認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		生活(人生)に役立つ		合計
生き方自己認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	1.8†	-1.8†	
高群	度数	63(68.7)	35(29.3)	98
	調整済み残差	-1.8†	1.8†	
合計	度数	129	55	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.39†$   
†  $p<.10$

Table 3-3 生き方自己認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		社会に役立つ		合計
生き方自己認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	1.9†	-1.9†	
高群	度数	68(73.5)	30(24.5)	98
	調整済み残差	-1.9†	1.9†	
合計	度数	138	46	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.52†$   
†  $p<.10$

Table 3-4 不思議現象認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		神秘的な		合計
不思議現象認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	1.8†	-1.8†	
高群	度数	71(75.5)	18(13.5)	89
	調整済み残差	-1.8†	1.8†	
合計	度数	156	28	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=3.35†$   
†  $p<.10$

Table 3-5 不思議現象認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		不思議な		合計
不思議現象認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	2.3*	-2.3*	
高群	度数	47(54.7)	42(34.3)	89
	調整済み残差	-2.3*	2.3*	
合計	度数	113	71	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=5.39*$   
\*  $p<.05$

Table 3-6 不思議現象認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

		オカルト(魔術・超自然的)な		合計
不思議現象認識欲求		イメージなし	イメージあり	
		低群	度数	
	調整済み残差	2.2*	-2.2*	
高群	度数	74(78.8)	15(10.2)	89
	調整済み残差	-2.2*	2.2*	
合計	度数	163	21	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。 $\chi^2(1)=5.05*$   
\*  $p<.05$

Table3-1～3-3より、生き方自己認識欲求の高群ほど心理学に「医学的な」イメージがない( $\chi^2(1)=3.25, p<.10$ )一方で、「生活(人生)に役立つ」( $\chi^2(1)=3.39, p<.10$ )や「社会に役立つ」( $\chi^2(1)=3.52, p<.10$ ) 学問としてイメージしている傾向が明らかとなった。また、Table3-4～3-6より、不思議現象認識欲求の高群ほど心理学に「神秘的な」( $\chi^2(1)=3.35, p<.10$ ) イメージや「不思議な」( $\chi^2(1)=5.39, p<.05$ ) イメージ、そして、「オカルト(魔術・超自然的)な」( $\chi^2(1)=5.05, p<.05$ ) イメージを持っていることが示された。

Table 3-7 客観的な認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

客観的な自己認識欲求		不思議な		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	67(59.6)	30(37.4)	97
	調整済み残差	2.3*	-2.3*	
高群	度数	46(53.4)	41(33.6)	87
	調整済み残差	-2.3*	2.3*	
合計	度数	113	71	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=5.08*$

\*  $p<.05$

Table 3-8 客観的な自己認識欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

客観的な自己認識欲求		社会に役立つ		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	80(72.8)	17(24.3)	97
	調整済み残差	2.5*	-2.5*	
高群	度数	58(65.3)	29(21.8)	87
	調整済み残差	-2.5*	2.5*	
合計	度数	138	46	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=6.11*$

\*  $p<.05$

Table 3-9 ネガティブな自己情報回避欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

ネガティブな自己情報回避欲求		人間的な		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	40(33.5)	68(74.5)	108
	調整済み残差	2.1*	-2.1*	
高群	度数	17(23.5)	59(52.5)	76
	調整済み残差	-2.1*	2.1*	
合計	度数	57	127	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=4.49*$

\*  $p<.05$

Table 3-10 ネガティブな自己情報回避欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

ネガティブな自己情報回避欲求		科学的な		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	74(79.8)	34(28.2)	108
	調整済み残差	-2.0*	2.0*	
高群	度数	62(56.2)	14(19.8)	76
	調整済み残差	2.0*	-2.0*	
合計	度数	136	48	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=3.95*$

\*  $p<.05$

Table 3-11 ネガティブな自己情報回避欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

ネガティブな自己情報回避欲求		医学的な		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	85(91.0)	23(17.0)	108
	調整済み残差	-2.5*	2.5*	
高群	度数	70(64.0)	6(12.0)	76
	調整済み残差	2.5*	-2.5*	
合計	度数	155	29	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=6.03*$

\*  $p<.05$

Table 3-12 ネガティブな自己情報回避欲求の高低と心理学イメージの関連に関するクロス集計表および $\chi^2$ 乗検定の結果

ネガティブな自己情報回避欲求		生物学的な		合計
		イメージなし	イメージあり	
低群	度数	83(87.5)	25(20.5)	108
	調整済み残差	-1.7†	1.7†	
高群	度数	66(61.5)	10(14.5)	76
	調整済み残差	1.7†	-1.7†	
合計	度数	149	35	184

注:カッコ内の数値は期待値を示す。

$\chi^2(1)=2.89†$

†  $p<.10$

Table3-7 ~ 3-8より、客観的な自己認識欲求の高群ほど心理学に「不思議な」( $\chi^2(1)=5.08, p<.05$ ) イメージや「社会に役立つ」( $\chi^2(1)=6.11, p<.05$ ) イメージを持っていることが分かった。さらに、Table3-9 ~ 3-12より、ネガティブな自己情報回避欲求の高群は心理学を「人間的な」( $\chi^2(1)=4.49, p<.05$ )イメージで捉える一方で、「科学的な」( $\chi^2(1)=3.95, p<.05$ )、「医学的な」( $\chi^2(1)=6.03, p<.05$ )、「生物学的な」( $\chi^2(1)=2.89, p<.10$ ) 学問としてイメージしている者は少ないということを示していた。

### 自己および不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源、心理学イメージの相互関連の検討

自己および不思議現象認識欲求4下位尺度の高低群の変数、心理学の情報源、心理学イメージ、性、そして不適応感や神経質傾向との関連の全体構造を検討するため、クロス集計表のデータに基づき多重コレスポネンス分析を行った。解析の結果、固有値は次元1が2.64、次元2が2.18であった。Table 4は、解析に用いた各項目のカテゴリーの選択度数(人数)、次元1と次元2のカテゴリースコアを示したものである。また、Figure 1に2次元のカテゴリースコアを用いて階層的クラスター分析(Ward法・平方ユークリッド距離)を行った結果を示した。Figure2は、多重コレスポネンス分析の結果に基づく各項目のカテゴリースコアを二

Table 4 自己および不思議現象認識欲求と心理学の情報源、心理学イメージの  
選択度数（人数）およびカテゴリースコア (n=184)

アイテム—カテゴリー	選択度数(人数)	次元1	次元2
女子生徒	93	.030	.267
男子生徒	91	-.031	-.273
1 1年生	88	.009	.078
2 2年生	44	-.019	.067
3 3年生	52	.001	-.189
生き方自己認識欲求低群	86	.170	-.548
生き方自己認識欲求高群	98	-.149	.481
不思議現象認識欲求低群	95	.073	-.593
不思議現象認識欲求高群	89	-.078	.633
客観的な自己認識欲求低群	97	.265	-.456
客観的な自己認識欲求高群	87	-.296	.508
ネガティブな自己情報回避欲求低群	108	-.123	-.245
ネガティブな自己情報回避欲求高群	76	.175	.348
1 悩みがちではない	43	.046	-.846
2 悩みがちかどうかはどちらとも言えない	46	.331	-.061
3 悩みがちである	95	-.181	.412
1 物事にはこだわる方だ	47	-.244	-.348
2 物事へのこだわりはどちらとも言えない	82	.216	-.011
3 物事にこだわらない方だ	55	-.114	.315
Q2-4-1 情報源にホンマでっかTV:なし	55	.344	-.539
Q2-4-2 情報源にホンマでっかTV:あり	129	-.146	.230
Q2-5-1 情報源にTVの情報・バラエティ番組:なし	130	.134	-.093
Q2-5-2 情報源にTVの情報・バラエティ番組:あり	54	-.323	.224
Q2-6-1 情報源に心理学専門書:なし	150	.195	.138
Q2-6-2 情報源に心理学専門書:あり	34	-.859	-.609
Q2-8-1 情報源に映画・ドラマの心理学者:なし	136	.097	-.106
Q2-8-2 情報源に映画・ドラマの心理学者:あり	48	-.274	.301
Q2-9-1 情報源にメンタリストDaiGo:なし	124	.065	-.227
Q2-9-2 情報源にメンタリストDaiGo:あり	60	-.134	.469
Q3-1-1 人間的なイメージ:なし	57	.409	-.096
Q3-1-2 人間的なイメージ:あり	127	-.184	.043
Q3-2-1 科学的なイメージ:なし	136	.152	.075
Q3-2-2 科学的なイメージ:あり	48	-.431	-.214
Q3-3-1 合理的なイメージ:なし	147	.290	.075
Q3-3-2 合理的なイメージ:あり	37	-1.152	-.298
Q3-4-1 神秘的なイメージ:なし	156	.083	-.049
Q3-4-2 神秘的なイメージ:あり	28	-.465	.273
Q3-5-1 医学的なイメージ:なし	155	.164	.112
Q3-5-2 医学的なイメージ:あり	29	-.875	-.597
Q3-6-1 数学的なイメージ:なし	164	.131	.055
Q3-6-2 数学的なイメージ:あり	20	-1.074	-.447
Q3-7-1 文学的なイメージ:なし	166	.126	.000
Q3-7-2 文学的なイメージ:あり	18	-1.158	-.002
Q3-8-1 動物学的なイメージ:なし	159	.190	.004
Q3-8-2 動物学的なイメージ:あり	25	-1.206	-.026
Q3-9-1 生物学的なイメージ:なし	149	.263	.085
Q3-9-2 生物学的なイメージ:あり	35	-1.121	-.360
Q3-10-1 不思議なイメージ:なし	113	-.035	-.398
Q3-10-2 不思議なイメージ:あり	71	.055	.633
Q3-13-1 生活に役立つイメージ:なし	129	.336	-.004
Q3-13-2 生活に役立つイメージ:あり	55	-.787	.009
Q3-14-1 社会に役立つイメージ:なし	138	.353	-.026
Q3-14-2 社会に役立つイメージ:あり	46	-1.058	.077
Q3-15-1 オカルトのイメージ:なし	163	.050	-.057
Q3-15-2 オカルトのイメージ:あり	21	-.391	.441

自己および不思議現象認識欲求と  
心理学の情報源、心理学イメージ

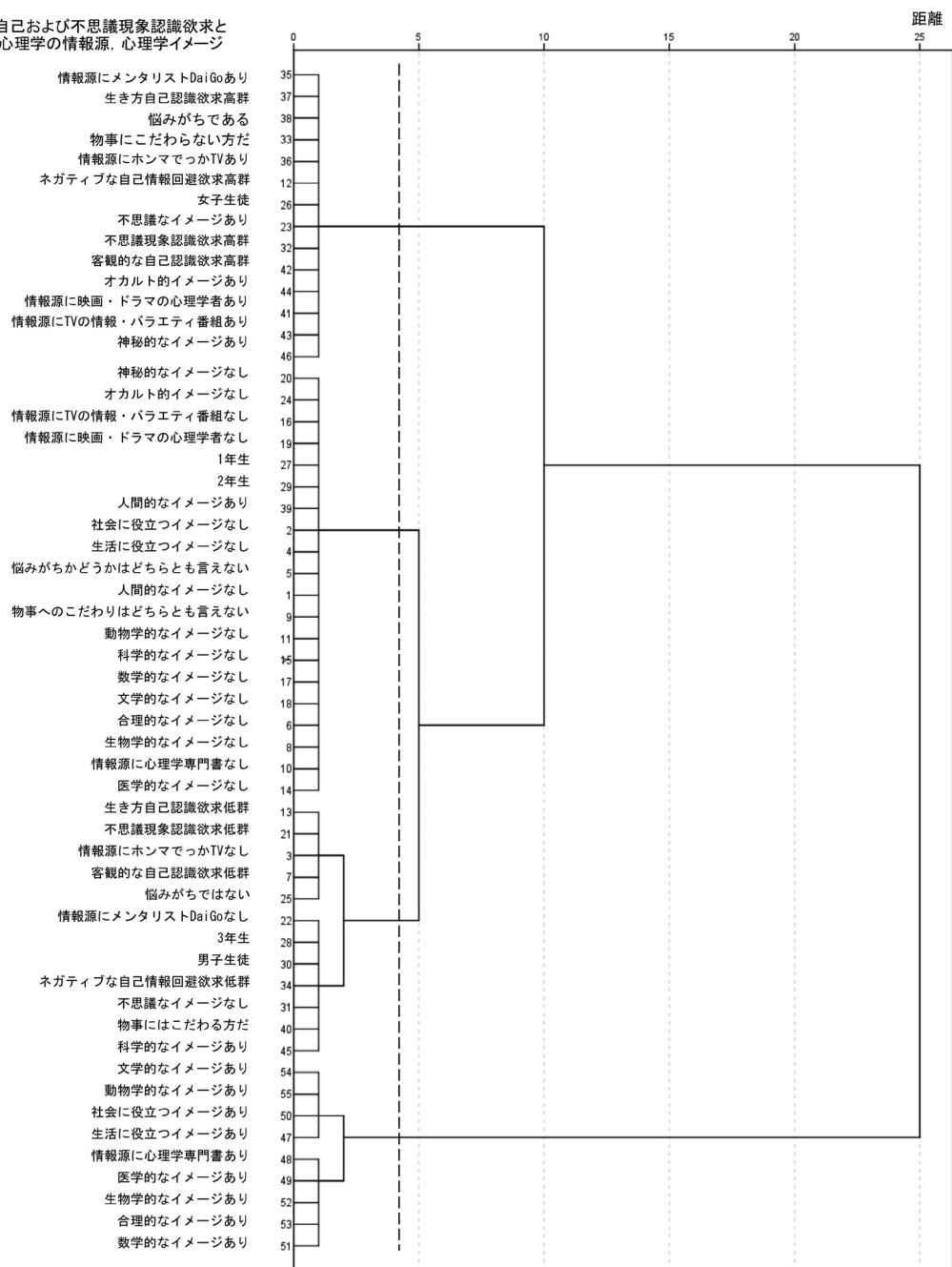


Figure 1 多重コレスポネンス分析によるカテゴリースコアを用いた  
クラスター分析のデンドログラム (Ward法・平方ユークリッド距離)

次元平面上にプロットした結果である。プロット図に布置されている項目同士の関連性を線で囲んだ4つのクラスターは、Figure 1のクラスター分析の結果に基づいている。

Figure 2 より、次元1の軸は、心理学イメージ各項目の選択、非選択反応を分離する軸であると解される。プラス側には何らかの心理学イメージありの項目が集まり、マイナス側は心理学イメージなしの項目群が集まっていることによる。次元2は、科学と非科学を分離する軸であると解釈される。プラス側には不思議・オカルト・神秘的イメージと通俗心理学的な情報源が集まっており、マイナス側には医学・数学といった自然科学的なイメージと心理学の専門書を情報源とするまとまりが形成されているためである。次に、4つのクラスター毎の項目の布置を見ていく。クラスター1は、不思議現象認識欲求の高群と生き方自己認識



Figure 2 自己および不思議現象認識欲求と心理学の情報源、心理学イメージの関係に関する多重コレスポネンス分析の結果

欲求の高群、客観的な自己認識欲求高群とネガティブな自己情報回避欲求の高群が布置し、情報源として「メンタリストDaiGo」や「ホンマでっかTV」、「映画やドラマの心理学者」、「TVの情報・バラエティ番組」が集まり、さらに「悩みがちである」が「物事にはこだわらない」人たちがまとまりをなしている。クラスター2は、心理学について特定の情報源を持たず、そのためか特定のイメージも形成されていないまとまりである。クラスター3は、心理学に「科学的な」イメージがあり、「不思議な」イメージはなく、「悩みがちではない」のと「物事にこだわる方だ」という「男子生徒」たちのまとまりであった。クラスター4は、心理学の専門書を情報源として、心理学に「医学的な・数学的な・生物学的な・合理的な」イメージと「文学的・動物学的・生活や社会に役立つ」イメージを形成しているまとまりであった。

#### IV. 考察

本研究は高校生を対象として、「心理学」の情報がどのような情報源から入手され、それらがどのような心理学イメージを形成し、さらにそこにはどのような心理的特徴が見られるのかについて調べることを目的としていた。大学生における心理学の学習動機には、自他理解、真理の追究、自己変革、生き方の発見や悩みの問題解決等が多いことが明らかにされている(吉村・望月、2000；谷口・金綱、2013)が、高校生が「心理学」という未知の学問にどのような期待やイメージを持っているのかは十分に明らかにされていない。そこで本研究では、自己認識欲求と不思議現象認識欲求の観点から心理学の情報源および心理学イメージの関連構造を明らかにし、泊(2015)との異同を確認することを目指した。以下、研究目的と仮説の検証結果について考察していくこととする。

#### 自己認識欲求および不思議現象認識欲求の尺度構成

泊(2015)で指摘されていた「自己および不思議現象認識欲求尺度」の構造の安定性や信頼性の問題を改善し、尺度の再検討を試みた。Table 1の因子分析結果より、第2因子と第3因子の順序が違っただけで、泊(2015)とほぼ同様の4因子構造の尺度が構成された。第1因子から第3因子については $\alpha$ 係数の値が.70を超えており、尺度の信頼性を一定水準で確保できていると言える。しかしながら、第4因子の「ネガティブな自己情報回避欲求」下位尺度は信頼性係数が $\alpha=.70$ を下回っており、あらためて項目内容や項目数の再検討が課題として残された。

今回のデータでは、これら4つの下位尺度得点の性差は「客観的な自己認識欲求」についてのみ有意で、女子の方が男子よりも得点が高かった。泊(2015)では客観的な自己認識欲求は有意傾向で、生き方自己認識欲求が有意であった。今回の知見は、前者の結果とは概ね一致するが、後者の生き方自己認識欲求の性差は支持されなかった。よって、青年期において客観的に自分を理解したいという欲求は、女子の方が男子よりも高い可能性が示唆される。項目レベルの分析では、「項目15：占いは、なぜ当たるか」で、有意傾向ながら女子の方が男子よりも平均値が高かった。一方、「項目18：(霊や超能力等の)不思議現象はすべて科学

で説明できるのか」は、有意傾向ではあるが男子の方が女子よりも平均値が高かった。松井（1997）と泊（2015）のデータでも、“占い系”信奉度は女子の方が高く、霊・超能力等の“不思議現象”には性差が見られない。質問の形式が、本調査では“知りたい”程度を評定させるもので、松井（1997）は“信じているか”どうかの多重回答形式という風に異なることも鑑みると、項目18の有意傾向の差は分析データの特性に由来するものであると考えられる。よって、松井（1997）や泊（2015）の知見と齟齬はないものと解される。

以上より、仮説1は一部を除いてほぼ支持されたと言えよう。

なお、予備的検討のために測定した不適応感の項目および神経質傾向の項目と、自己および不思議現象認識欲求の4下位尺度との相関分析の結果より、不適応感が高いほど客観的に自分を知りたい欲求や不思議現象認識欲求が高いこと、神経質傾向が高くないほど不思議現象認識欲求が高いことが示された。前者の結果は先行研究（上瀬、1992, 1996；小城他、2008）と一致するが、後者の結果は先行研究の知見（小城他、2008；松井、2001；田丸・今井、2001）とは逆であった。本サンプルのデータは、自己認識欲求の喚起や不思議現象認識欲求の喚起が不安に動機付けられて正確な科学知識を求めて起こるというよりも、むしろ自分に都合良く解釈できる自己肯定的な情報を求めて起こることを示唆すると考えられる。

#### 自己および不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源、心理学イメージの関連の検討

自己および不思議現象認識欲求4下位尺度の高低群の変数と心理学の情報源の変数をクロス集計し、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った結果（Table2-1～2-6）より、生き方自己認識欲求の高群ほど「TVの情報・バラエティ番組」や「メンタリストDaiGo」を心理学の情報源として利用している傾向があり、不思議現象認識欲求の高群ほど有意に「ホンマでっかTV」や「メンタリストDaiGo」を心理学の情報源として利用していることが示された。また、客観的な自己認識欲求の高群ほど「家族や高校の先生以外の人の心理学の話や講演」を情報源として利用する傾向があり、「映画やドラマの心理学者」を情報源として利用する者が有意に多かった。これらの結果は、仮説2の前半部分を概ね支持しており、自己認識欲求の喚起は客観的・専門的・科学的な情報源よりも、情報・娯楽番組等の提供する通俗心理学的な心理学情報の利用と結びつくことを示している。この結果は、泊（2015）とも一貫した傾向である。すなわち、高校生は自分自身のことや生き方のこと、不思議な現象の理解など諸々の問題について、「心理学」がそれらに何らかのヒントや解を提供してくれることを期待し、手近な民放番組等の心理学情報源への接触を通して、こうしたニーズを充たしているものと考えられる。彼らにとって、そこで提供される情報が科学的・客観的に正しい知見かどうかは問題ではなく、自身が抱く悩みや不安、解決困難な問い等に対して、それを解消ないし緩和してくれるような明快な答やストーリーを提供する情報こそが重要なのである。言い換えれば、心理学はまさにそうした役割を期待される学問であって、必ずしも科学的・客観的で正確な知見を提供する学問とは見なされていないことを示唆する。この考察の妥当性は、次に紹介する心理学イメージとの関連分析の結果からも裏付けられる。

Table3-1 ～ 3-12の結果より、生き方自己認識欲求の高群ほど心理学を「生活や社会に役立つ」ものと捉える傾向が見られるが「医学的な」イメージは少なく、不思議現象認識欲求の高群ほど心理学を「神秘的・不思議・オカルト的」なイメージで捉えていること、客観的な自己認識欲求高群でも、心理学は「社会に役立つ」が「不思議な」学問と見なされている。さらに、ネガティブな自己情報回避欲求高群ほど、心理学を「医学的・科学的・生物学的」なイメージで捉えていないことが分かる。つまり、アカデミックな心理学に触れた経験がなく、かつ悩みや不安を抱える高校生にとって心理学は科学的に正確な知識を提供する学問としてよりも、むしろ得体の知れない不思議さでもって役に立つ学問と考えられているのである。これらの結果は、仮説2の後半部分をほぼ支持しており、仮説2は全体としても支持されたとと言える。

高校生にとって、そもそもアカデミックな心理学の知見にアクセスする機会は極めて乏しいがゆえに、それが科学的で客観的な知見を提供することを目指す学問だと認識することは難しい。ましてや、身近に入手できる通俗心理学的な情報は科学的に厳密な体裁をまとうよりも、むしろ神秘的で不思議な印象を与える性質のものが多くと考えられる。そうした手近な心理学情報源に期待されるのは、堀野・上瀬（1994）で示されたように、自己や対人関係の問題を解決・緩和する機能や、娯楽的な機能なのである。したがって、アカデミックな心理学も彼らにとっては科学性のイメージよりは、了解困難な不思議さを持つ科学と非科学の狭間に位置するような学問として捉えられている（東・橋本・加藤・藤本、1994）のであろう。

### 自己および不思議現象認識欲求の高低と心理学の情報源および心理学イメージの関連の検討

自己および不思議現象認識欲求と心理学の情報源、心理学イメージ、性、そして不適応感や神経質傾向との関連性を多重コレスポネンダ分析で検討した結果に基づき考察する。

Figure 2 より、高校生において、心理学に関する情報源とイメージは4つに大別されることが明らかとなった。第1に、クラスター1に見られるように、民放TVの情報・娯楽番組やバラエティ番組、あるいは映画やドラマを情報源とする不思議で神秘的でオカルト的な学問というイメージである。このまとまりには、自分のことや自分の生き方について客観的に知りたいがネガティブな自己情報は回避したいという欲求が高く、「悩みがちである」が「物事にはこだわらない方だ」という特性を持った人が布置している。すなわち、心理学に悩みや問題の解決・緩和を期待するが、自己評価を低下させるかもしれない正確な科学知識よりも、自己肯定的な情報なら自己に都合よく解釈し、逆に自己否定的な情報なら無視できるような疑似科学的な学問として心理学を捉えている一群だと考えられる。泊（2015）では2つのクラスターに分かれていた「神秘・オカルト系」と「通俗心理学系」が高校生では渾然一体となって析出されてきたものと言える。

なお、第2クラスターは心理学について特定の情報源もイメージも持っておらず、高校1、2年生が同時に布置された原点付近のまとまりである。本調査対象者の約7割を占める高校1、2年生にとって心理学はまさに未知の学問なのであろう。裏を返せば、白紙状態にある



ような彼らに対して、アカデミックな科学としての心理学の姿を正確に紹介することが重要である。

第3クラスターは真理探究系と解釈されたが、このまとまりは、情報源が通俗心理学的なメディアではなく、科学的なイメージを持ち、自己および不思議現象認識欲求の全てが低群で、悩みがちではなく、物事にこだわる方だという者が布置していた。このクラスターは、仮説3では想定していなかったまとまりであり、通俗心理学的なメディア情報に接触せず、かつ自己や不思議現象を認識したいという欲求が低い高校生では、心理学が真理を探究する科学的分野として位置づけられている可能性が考えられる。

最後に、第4クラスターは、心理学の専門書を情報源として、自然科学的な学問的イメージと共に、文学的で生活や社会に役立つイメージも合わせ持った学問と見なされているまとまりであった。泊（2015）では「文学系」と「サイエンス系」に分かれていたまとまりが一塊となったものと言える。心理学の専門書を情報源として利用する中で、心理学が文系と理系の融合したような学問分野であると捉えられているのかもしれない。

以上の結果は、仮説3を概ね支持していると言える。第3クラスターの心理学情報源が必ずしも明確ではないため、さらなるデータの蓄積が必要だと考えられるが、Figure 2のプロット図を全体的に見ると、心理学にほとんど触れたことがない高校生の心理学情報源と心理学イメージの構造は、大学生の構造（泊、2015）に比べると、予想した通り未分化な状態にあることが示唆される。東ほか（1994）や泊（2015）でも示唆されたように、心理学という学問をよく知らない人たちにとって心理学は、科学と非科学が混在したもの、あるいはアートとサイエンスと疑似科学が同居する三層構造を成していると言えるだろう。したがって、一般の人々が持つ心理学の知識やイメージに合わせて、アカデミックな心理学の実状を正しく紹介し妥当な認識を持ってもらうことが、今後の心理学教育の課題となるだろう。

## V. 結論と今後の課題

本研究は、学問としての心理学をよく知らない高校生を対象に心理学の入門講座を開講する前に、彼らが抱えている心理学イメージや普段利用している心理学情報源について調査し、両者の関連性の構造を明らかにすることを目的としたものである。一般教養科目を受講する大学生を対象とした泊（2015）の知見と概ね一致する結果が得られた。すなわち、（1）心理学への興味や関心の背景には自他理解や問題解決への期待ならびに娯楽的機能があり、通俗心理学的なTVの情報・バラエティ番組等が、それらのニーズを充たす役割を担っていること、（2）心理学という学問は、科学性よりも不思議さや神秘性に充ちた学問分野であると捉えられていること、（3）高校生における心理学の情報源およびイメージの構造は4つにまとめられ、「神秘・オカルト・通俗心理学系」、「真理探究系」、「文学・サイエンス系」、そして「情報源・イメージ無し」であること、（4）心理学は生活や社会に役立つ学問と捉えられているが、それは科学知識の提供機能としてよりも不安や悩みを軽減する不思議なオカルト的機能を持つものとして見なされていること、である。

本研究の課題を指摘する。第1の課題は、自己および不思議現象認識欲求尺度の項目数や内容、評定段階などを全面的に見直し、さらに洗練された尺度を構成することである。尺度の信頼性や内容的妥当性をより高めることが必要である。第2の課題として、自己および不思議現象認識欲求が心理学系の進路選択や情報収集・心理相談行動とどのように関係しているかについて明らかにすることである。特に、今回の予備的検討項目の成果もふまえて、不安傾向や不適応感を測定する適切な心理尺度を用いた検討が必要である。今後の大学における心理学教育や高大接続のあり方を考える上でも、実証的なデータの蓄積が望まれる。

### 引用文献

- 東正訓・橋本尚子・加藤徹・藤本忠明（1994）大学生の心理学観Ⅱ—心理学者との比較—  
追手門学院大学文学部紀要、**29**、1~13.
- 堀野緑・上瀬由美子（1994）青年期における自己情報収集行動 教育情報研究：日本教育  
情報学会学会誌、**10**(2)、55-62.
- 上瀬由美子（1992）自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として—  
心理学研究、**63**(1)、30~37.
- 上瀬由美子（1996）自己認識欲求と自己概念不明確感の関連 東京女子大学紀要論集、  
**46**(2)、83-98.
- 上瀬由美子・堀野緑（1995）自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景：青年期  
を対象として 教育心理学研究、**43**、23~31.
- 菊池聡（1999）超常現象の心理学—人はなぜオカルトにひかれるのか— 平凡社新書
- 今野裕之（2000）心理学とは 松井豊（編）高校生のための心理学 大日本図書 pp.13-  
31.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩（2008）不思議現象に対する態度：態度構造の分析および  
類型化 社会心理学研究、**23**(2)、246-258.
- 松井豊（1997）高校生が不思議現象を信じる理由 菊池聡・木下孝司 不思議現象—子  
どもの心と教育 北大路書房 pp.15-36.
- 松井豊（2001）不思議現象を信じる心理的背景 筑波大学心理学研究、**23**、67~74.
- 日本学術会議心理学・教育学委員会心理学教育プログラム検討分科会（2008）対外報告「学  
士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて」 日本学術会議
- 大辻隆夫・塩川真理・加藤征宏・松葉健太郎（2005）高校心理学導入に関する一研究—生  
徒及び教師の意識調査結果からの検討— 京都女子大学発達教育学部紀要、**1**、39-50.
- 高橋美保・仁平義明（2010）心理学は高校「倫理」教科書の中でどのように扱われているか  
日本心理学会第74回大会発表論文集、1169.
- 田丸敏高・今井八千代（1989）青年期の占い指向と不安 鳥取大学教育学部研究報告 教

- 育科学、**31**、225-260.
- 谷口麻起子・金剛知征（2013）心理学に対する専攻動機と期待に関する調査研究 聖泉論集、**21**、35-47.
- 泊真兎（2015）共通科目「心理学」受講生における心理学の情報源と心理学イメージの関連—自己認識欲求の観点からの検討— 地域文化論叢（沖縄国際大学大学院地域文化研究科）、**16**、1-21.
- 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子（1987）プロマックス回転法による新性格検査の作成について（I）心理学研究、**58**、158-165.
- 吉村智恵子・望月久乃（2000）教養科目「心理学」の講義内容に関する検討 名古屋女子大学紀要（人文・社会編）、**46**、143-152.

---

---

# A study on the relationship between information of psychology and images of psychology in high school students.

—From the viewpoint of self-recognition need and attitudes towards paranormal phenomena —

Shinji Tomari

---

---

## Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship between information of psychology and images of psychology in high school students. One hundred and eighty four high school students responded to a questionnaires regarding information of psychology, images of psychology, self-recognition need and attitudes towards paranormal phenomena. The results showed that: (1) self-recognition need and attitudes towards paranormal phenomena significantly associate with information of popular psychology such as “Menta- list DaiGo,” “Honma-dekka TV” . (2) Relationship between information of psychology and images of psychology in high school students were four types: a “Mysterious and Magical image cluster,” a “No image cluster,” a “Searching exploration of truth image cluster,” and a “Literature and Science image cluster.” The implications of these findings for psychology education were discussed.

Key words : self-recognition need、 attitudes towards paranormal phenomena、 information of psychology、 images of psychology、 psychology education